



日本のマンガ

面白いので、前号の続き。

*

ヨーロッパのコミック界に日本のMangaが入った時、何が起こったか。

まず、それまで見慣れてきたコミックス(バンドデシネ=B D)とは何もかもが異なっていて新鮮だった。一冊48ページ・オールカラーで完結するのが基本のヨーロッパのB Dとは違い、日本のマンガは長く起伏のある物語が続き、しかもモノクロである。ページも多いし判型も小さい。(もっとも、初期には、アメコミの人气が強いスペインなどでは、日本のマンガがアメコミの形式に合わせて薄いパンフレットのような冊子形式・左開きで出版されたこともある。)

そしてなによりこれが大事なのだが、そこには子供たちが、しかももはや完全に「子供」とは言えない思春期の子供たちが、求めてやまない熱があった。

それも当然だろう。日本のマンガは、だいたい小学校高学年から高校生くらいまでをメインのターゲットにした作品が主流である。しかも読者の子供たちが自分のお小遣いで買い、そうした子供たちからのフィードバックを組み入れつつ作品が作られているのだ。

ヨーロッパのバンドデシネには、「タンタン」のような子供向けの作品もある一方で、大人が感嘆するような芸術性の高い作品もある。が、その間をつなぐ思春期向けの作品はなかった。

もっと言えば、「タンタン」も、子供に買い与えるのは大人である。つまりヨーロッパには、子供が、とくに思春期の子供が、自分のお小遣いで買いたくなるようなコミック作

品はほとんどなかった。日本のMangaは、その隙間にすっぽりとはまったのだ。

ヨーロッパだけではない。アメリカにしろアジアにしろ、思春期の子供向けのマンガ(コミック)作品を、もともと層厚く持っていた国はほとんどない。日本のMangaは何より、そうした「自分たちのためのコミック」をもたない若い層にアピールした。

どちらかと言えば客観的に物語を語る傾向が強い欧米のコミックに対し、日本のマンガは、主人公に自分を重ね、物語の中に読者を巻き込んでいく傾向が強いこともそれに拍車をかけたことだろう。

もちろんそれ以外に、アニメの影響も大きい。だいたいどこの国でもMangaが人気になる前に、TVで放映された日本のアニメが人気になり、その原作だというのでMangaを読み始めるという流れが見られる。

フランスでは70年代末から永井豪『U F O ロボ グレンダイザー』(ヨーロッパでは『ゴールドラック』)が記録的な視聴率をあげたことで知られているが、世界中で突出して人気なのは、何とんでも鳥山明『ドラゴンボール』である。各国が日本マンガの版權を求めて日本詣でを始めるのは、たいていの場合『ドラゴンボール』がきっかけになっていると言っても過言ではないくらいだ。

*

宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』がアカデミー賞をとったのは2003年だったが、もう15年も前になるわけだ。その間に、日本のアニメやマンガは世界的なコンテンツへと変身を遂げた。恐るべしである。